

私がゴルフを始めたのは、大学を卒業後、1年の大学研修を終えて大阪の関連病院に勤務を始めた昭和58年のことです。当時の泌尿器科部長のお付き合いという理由でしたが、3カ月の猛練習で臨んだ初ラウンドのスコアは129だったと記憶しています。部長が初ラウンドで130を切ったことをお祝いして、ゴルフ用のポロシャツをプレゼントしてくれたことも良く覚えています。数年間熱中しましたが、結局100前後のゴルフで停滞していました。スイングの勉強もせず、レッスンプロに習うこともありません。力任せのゴルフでした。うまく当たると気持ち良く飛んで行くのですが、OBが何発も出るゴルフでした。

その後、大学院に入り、ニュージーランドに留学し、京都大学に助手として帰学しました。2年間のニュージーランド留学中には、年に数回ではありましたが家内とお遊びのゴルフを楽しみました。しかし、それ以外は忙しさとお金に余裕が無かったために、まじめにゴルフに向き合うことはありませんでした。

再度ゴルフに向き合うよ

うになったのは、今から20年前に秋田大学に助教授として着任してからです。しかし、相変わらず多忙の医師生活でしたので、教授のゴルフのお供をする程度で、やはり力任せの100叩きゴルフは続いていました。

平成10年、縁あって現在のポジション(京都大学泌尿器科教授)に着任し

ところ、なんと劇的にOBが減ったのです。練習に行けなくても勉強だけでうまくなることを知った限りは勉強せざるを得ません。教授になりますと、好むと好まざるとに関わらず東京などへの出張が増えます。この移動の時間を利用してゴルフの勉強をすることにしました。

コンペ(京滋プロと呼んでいます。ちなみにプロはプロフェッサーの意味です)では、楽しく、また激しく競い合いました。

私は中学・高校と陸上部で短距離を走り、大学ではラグビー部に在籍していました。また、スキーの指導員だった父の影響で、スキーもそこそこの腕前です。

見て、一番適切な道具を選択するわけです。ハザードが怖い時には、いくら距離がほしくても短いクラブを選択することがあります。また、ライ次第ではグリーンそばからフェアウェイウッドを使うこともあります。刻々と変化する状況を的確に判断して、メス、クーバー、メツェンなど形状の異なる多くの道具を選択しながら、安全に手術を進めていく過程と似ていると思いませんか(唯一違うのは、外科手術では絶対にOBを出してはいけないことです)。

また、私が最も大切にしているのが、ゴルフを通じて知り合うことの出来た友達との交流です。ゴルフクラブに所属すると医師だけではなく、多くの他の職業の人ともお付き合いが広がります。新しく知り合った方の見識の深さや人間的な魅力に圧倒されることもあります。私の父は現在86歳になりますが、未だに元気でラウンドしています。父の年齢まで私にゴルフが出来るかどうかわかりませんが、生涯の趣味として、また人生勉強のひとつとして、今後も末永く真剣に向き合っていきたいと思っています。



時間の風景

860

趣味と勉強を兼ねたスポーツ： ゴルフに想う

京都大学泌尿器科学教室教授 小川 修



ましたが、ここから私のゴルフは大きく変わりました。それには、いくつか要因がありました。まず、教授就任後に招待された秋田大学のゴルフコンペで、同門のベテラン先生から「先生のグリップは直したほうが良い」と指摘していただいたことです。それまで自分のグリップやスタンス、スイングについて勉強したことはありません。言われるがまま素直にグリップを直した

もうひとつは、京都大学医学研究科の教授会にゴルフの大好きな先生方がおられ、常に闘争心をかき立てられたことです。特に現名誉教授の本庶佑先生(PD-1の発見者として高名な免疫学者の先生です)は、シングルクラスの腕前で、当時はハンデをいただいても全く歯が立ちませんでした。京都大学、京都府立医大、滋賀医大の3大学の教授と名誉教授が参加するゴルフ

いろいろスポーツを経験してきた私ですが、ゴルフほど勉強することが上達につながるスポーツは無いのではないかと思うのです。また、自分勝手な理屈ですが、ある意味で外科医としての資質も伸ばしてくれるかもしれません。

ゴルフでは、14本のクラブを与えられた状況に依じて使うことに迫られます。必要な飛距離、ハザードの場所、ボールのライを